

資料番号	巻数	表題	内 容	備 考
1		蒨原捨葉目録		
2		蒨原捨葉目録		
3	巻一	小笠原歴代記	笠系大成付録所収の溝口家記にして小笠原氏の支族溝口美作守貞康が、小笠原歴代及び其の支族につき慶長13(1608)年頃迄簡明に記されている。	
	巻二	小笠原系図	(欠本)	
	巻三	大塔記	応永7(1400)年小笠原長秀が入信し、村上満信等を始め北信の諸豪と川中島に戦った顛末を記したもので、著作者は、或は高坂宗継といい、或は僧堯深というが明らかではない。	上伊那郡教育会復刻「蒨原捨葉第参輯」収録
	巻四	二木寿斎記	笠系大成付録二木家記、史籍収覧及鈴木叢書には寿斎記とある。小笠原兵部大輔の望みにより、二木寿斎の筆で小笠原長時が武田晴信(信玄)に追われ、その子貞慶が徳川氏を頼って旧地に還住したまでの事が書かれている。南信の当時の状勢がよくわかる。	上伊那郡教育会復刻「蒨原捨葉第十一輯」収録
4	巻五	小平物語	諏訪家の臣小平向右衛門が父祖の言を筆録したもので、天文(1532-1554)から天正(1573-1591)頃に至る南信の諸豪の盛衰治乱等を詳細に述べてある。本書は中村元恒正本の最も完備したものである。寿斎記と共に信濃資料叢書に収まっている。	
	巻六	小平氏系	小平氏の系図で、註書入れが非常に多い。	
	巻七	有賀氏系譜	伊那の郷土有賀氏の系譜で、武田信玄頃より保科正之頃迄の主なる人々の事蹟が書かれている。	上伊那郡教育会復刻「蒨原捨葉第拾貳輯」収録
	巻八	樋口氏家譜	樋口兼遠よりの家譜であって、保科正之頃迄の人々の事蹟を書いている。	上伊那郡教育会復刻「蒨原捨葉第拾貳輯」収録
5	巻九	信濃宮伝	宗良親王及尹良親王等の事蹟を述べたものであり、記事簡明にして精確を欠き、且つ異説もすこぶる多い。元恒は通俗に流布せる信濃宮伝を分節して、各節毎に他の諸書諸説を傍引し、又異説を掲げて参考に資する等してあり、宗良親王研究の好著である。	
	巻十	異本信濃宮伝	主として宗良親王に関するものであるが、信濃宮伝とは内容著しく異なるものにて異本と称したのか。この内容は南方紀伝にある。	上伊那郡教育会復刻「蒨原捨葉第一号」収録
	巻十一	浪合記	宗良親王及尹良親王等及びその子良王の伝記で、殊に南信に於ける行動を詳述し、其の子孫及び部下の事に及んでいる。	上伊那郡教育会復刻「蒨原捨葉第参輯」収録

5	卷十二	異本浪合伝		尹良親王を中心とした記録。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第參輯」収録
	卷十三	浪合記別集		尹良親王及び良王等に関する伝記や、事件の異説其の他を、中村元恒が収録したもので、浪合記の参考として重要なものである。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第參輯」収録
	卷十四	甲斐風土記		(欠本)	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾四輯」収録
	卷十五	青表紙		(欠本)	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第一号」収録
	卷十六	信濃名所短歌		(欠本)	
6	卷十七	松代通記	上	桃井友直の撰で、滋野氏以来松代城を拠つた諸氏を説き、殊に真田氏を詳説して享保12(1727)年に至っている。	
	卷十八	松代通記	下	卷十七に同じ	
	卷十九	真田内伝		(欠本) しかし巻外本にある。(上伊那教育会復刻版)	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾六輯」収録
7	卷二十	村上家伝		信濃村上源氏の正系として伝えられる系図で、註書に依って事蹟を記し、義清、国清等は詳細である。	
	卷二十一	芦田記		一名依田記とも言われている、依田常陸介の伝記である。將軍の求めにより、その出生より諸処の武功を経て小諸攻で討死をする迄を記したものである。常陸介が信州芦田城(現・立科町)に居たので芦田をも名乗った。	
	卷二十二	川中島合戦次第 上杉家之記		一名川中島五戦記ともいわれ、川中島の戦記である。須坂の堀内氏の書留と、信玄の子 武田信光家伝とを合わせて、上杉家の清野助次郎と井上隼人正が慶長20(1615)年に撰したものである。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第七輯」収録
8	卷二十三	下条由来記		下条村の由来沿革と、下条氏の変遷を述べ、下伊那の状況を伺う事が出来る。	
	卷二十四	遠山家由緒		簡略な遠山家の系図と其の人々の事蹟の大略。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾貳輯」収録
	卷二十五	知久家由緒		知久頼元よりその子孫一族の事蹟を、弘治(1555-1557)頃より元和(1615-1623)頃迄を記したもの、之義將軍の記事も僅かに見える。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾貳輯」収録
	卷二十六	関川氏代々記		下伊那郡市田村の関川氏の簡単なる代々記で文化7(1810)年になったものである。	
9	卷二十七	筑摩安曇古城 開記	上	信濃開国より、各地諸豪の由来を詳細に記し、仁科氏の事蹟もあり、信府統記の古城記とほぼ同じである。	
	卷二十八	筑摩安曇古城 開記	下	城跡について開創沿革を述べてある。	

10	卷二十九	諏訪大明神画詞	上	諏訪大社の縁起を画きこれに詞を添えたものである。然し画は欠けている。本書は転写本が多いので、いづれにより採ったのか明らかではない、諏訪資料叢書に詳細な説明がある。	
	卷三十	諏訪大明神画詞	下	卷29に同じ	
11	卷三十一	諏訪神社記	上	(欠本)未写の為なし	
	卷三十二	諏訪神社記	下	諏訪神社の祭事慣例等を記載したもので、古文書を引用してある。	
12	卷三十三	甲乱記		高坂弾正昌信の家臣春日総次郎の作で武田氏滅亡の次第を記したものである。即ち木曾義昌の叛より織田氏侵入を述べ、武田氏滅亡までを記し、当時の南信情勢を知ることができる。史籍集覧、信濃史料叢書、続群書類従等にも採録されている。	上伊那郡教育会復刻「蓀原拾葉第二号」収録
	卷三十四	妙法寺記	上	甲斐(現・山梨県南巨摩郡)の妙法寺に伝わる、文正元(1466)年より、永禄4(1561)年までの96年間、甲駿信越及坂東諸国の世熊事変等の記録で史家の尊重するものである。	
	卷三十五	妙法寺記	下	卷三十四に同じ	
13	卷三十六	木曾略系		木曾氏の簡単な系図である。	上伊那郡教育会復刻「蓀原拾葉第参輯」収録
	卷三十七	木曾伝記		一名木曾軍紀記とも称し、義仲より義昌の子までの人物の事蹟を記し、殊に戦国時代の人々は詳細である。尚山村家譜、山村氏略系、木曾谷神社仏閣、御番所、木曾路道程等の題下に説明がある。	上伊那郡教育会復刻「蓀原拾葉第一号」収録
	卷三十八	舊俗伝		別名松本開記とゆう、太古より徳川時代の始めまで、安曇野筑摩地方の領主の変遷を記してある。	
	卷三十九	飯田記		飯田城主の変遷を記し、特に阪西氏については異説をあげて説明してある。	上伊那郡教育会復刻「蓀原拾葉第十輯」収録
14	卷四十	美濃御坂越記		木曾の原旧富の著で、神坂峠の沿革、其の沿道の村落、城址、名所、古跡を挙げ、尚木曾川西の古道即ち中仙道をも説いている。	上伊那郡教育会復刻「蓀原拾葉第四輯」収録
	卷四十一	木曾古道記		卷四十と同じ原旧富の著である。信濃及び南信に於ける木曾に関係ある史実を掲げ、木曾の名所古跡、郷村、名族を述べ、木曾の郷土を記載している。	上伊那郡教育会復刻「蓀原拾葉第四輯」収録
15	卷四十二	塩尻夜話記		多賀谷跳翁の著である。塩尻に泊まり小野吉左工門、吉江助右衛門等老人を尋ねて、武田、小笠原両氏及び松平出羽守直政等に関したものが多し。	
	卷四十三	東間両泉の略誌		松本の儒者木沢天童の著書。簡単に山辺及び浅間両泉の沿革に併せて、松本領主の変遷も記してある。	上伊那郡教育会復刻「蓀原拾葉第拾四輯」収録

15	卷四十四	駒ヶ岳一覽記		元文元(1736)年、高遠藩士安藤太郎兵衛正陽、内藤庄右衛門等、藩命を受け、西駒ヶ岳に登山し其の見分の復命書で、駒ヶ岳の文献として重なるものである。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第八輯」収録	
	卷四十五	後駒ヶ岳一覽記		宝暦6(1756)年8月、坂本運四郎英臣が、藩命によって登山見分した復命書である。 前巻と共に当時の西駒ヶ岳の様子が十分にわかる。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第八輯」収録	
	卷四十六	桃沢氏紀行		上伊那の桃沢夢宅が、京都へ上った時の紀行文である。 年月は不詳であるが、滞在中の歌人等の交友送別の歌などがある。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第八輯」収録	
	卷四十七	姨捨紀行		中村元恒の父伯先が、上穂より姨捨山に遊んだ時の紀行文で、俳句も相当ある。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第八輯」収録	
16	卷四十八	信府感状記	上	感状、制札、知行書、寄進状、下文、信書等、天正(1572-1591)より元和(1615-1623)頃まで蒐めてある。 武田、上杉、小笠原氏に関し、天正(1572-1591)頃の古文書が最も多い。参考とすべき良書である。		
	卷四十九	信府感状記	下	卷四十八に同じ		
17	卷五十	信府統記		信府統記は卷50より卷81迄信府統記である。 松本城主水野忠幹及忠恒が、家臣の鈴木重武、三井弘篤に命じて作ったもので、享保7年9月寄稿して、享保9年12月に完成した。松本藩領を始め、信濃全国の地理歴史等に関して記述したものであって、領内は最も詳細である。		
			第一	諸城記		
	卷五十一	信府統記	第二	諸城記		
	卷五十二	信府統記	第三	信濃国郡境記		
	卷五十三	信府統記	第四	信濃国郡境記		
	18	卷五十四	信府統記	第五	信濃国郡境記	
		卷五十五	信府統記	第六	信濃国郡境記	
		卷五十六	信府統記	第七	信濃国郡境記	
	19	卷五十七	信府統記	第八	松本領御朱印郷村高辻 一	
		卷五十八	信府統記	第九	松本領御朱印郷村高辻 二	
	20	卷五十九	信府統記	第十	松本領御朱印郷村高辻 三	
		卷六十	信府統記	第十一	松本領御朱印郷村高辻 四	
	21	卷六十一	信府統記	第十二	松本領御朱印郷村高辻 五	
		卷六十二	信府統記	第十三	松本領御朱印郷村高辻 六	
	22	卷六十三	信府統記	第十四	松本領御朱印郷村高辻 七	
		卷六十四	信府統記	第十五	松本領御朱印郷村高辻 八	
	23	卷六十五	信府統記	第十六	安曇筑摩両郡寄	
卷六十六		信府統記	第十七	舊俗伝		

24	卷六十七	信府統記	第十八	松本領古城記	
	卷六十八	信府統記	第十九	松本領諸社記	
25	卷六十九	信府統記	第二十	松本領諸社記	
	卷七十	信府統記	第二十一	松本領諸寺院記 上	
26	卷七十一	信府統記	第二十二	松本領諸寺院記 下	
	卷七十二	信府統記	第二十三	松本城地形間敷記 きわめて詳細に、付属屋敷、城下町数、軒数、諸道具等も記されている。	
27	卷七十三	信府統記	第二十四	御裁許記 寛文より享保頃迄の伊那郡との争議が記されている。	
	卷七十四	信府統記	第二十五	松本領諸件別記 一	
28	卷七十五	信府統記	第二十六	松本領諸件別記 二	
	卷七十六	信府統記	第二十七	松本領諸件別記 三	
29	卷七十七	信府統記	第二十八	松本領諸件別記 四	
	卷七十八	信府統記	第二十九	松本領諸件別記 五	
	卷七十九	信府統記	第三十	名所記付古歌	
30	卷八十	信府統記	第三十一	道程記	
	卷八十一	信府統記	第三十二	道程記	
31	卷八十二	異本信府統記	上	主として古城跡と城主の変遷を記したもので、信府統記中の諸城記の書抜きと思われる。	
	卷八十三	異本信府統記	下	信濃一円にわたり主に名勝を記述してある。	
	卷八十四	諏訪神系略伝		原本なく目録に巻数と書名のみ有り。恐らくは、諏訪神系図に多少の注釈をしたものではないか。	
	卷八十五	鉾持社伝		原本なく目録に巻数と書名のみ有る。高遠町鉾持神社の縁起、二三種あるが其のなかの何かを採録したものであろう。	
32	卷八十六	増補吉蘇志略	上	木曾志略は松平秀暈が、尾張藩主の命を受けて、木曾の地理、沿岸を記述したもので、上巻には、木曾南部地方を記載してある。	
	卷八十七	増補吉蘇志略	中	須原、贄川方面の記述。	
	卷八十八	増補吉蘇志略	下	荻曾より大滝方面の記述。	
33	卷八十九	石川玄藩記		松本城主石川玄藩の家臣二派に分かれて相争ひ、玄藩も大久保石見守の陰謀に加わった疑いを以て改易させられた始末記。	
	卷九十	水野家落客記		旧稿には水野家興廢記とある、水野忠清が松本城主となって以来、水野氏歴代の大略で、忠恒の没落及其の後始末については殊に詳しい。家来水野惣兵衛の作と伝えられる。	

34	卷九十一	脇坂家分限帳		飯田藩主脇坂家、家臣の職と俸禄を記したもの。	
	卷九十二	鳥居候高遠屋敷帳		簡明に高遠城主鳥居候時代の城屋、建物の広さ、主な藩臣の屋敷、禄高、職名等を記す	
	卷九十三	鳥居家分限帳		高遠城主鳥居侯の藩臣の職名禄高である、元禄元年の調である。	
	卷九十四	水野家分限帳		松本城主水野氏の部下の職、俸禄を身分の低い者迄も記載し、尚城屋の建物家中軒数も記してある、水野隼人正の没落の頃のものではないか。	
	卷九十五	温故堂遺事		(欠本)	
35	卷九十六	内藤氏言行録		高遠藩臣城戸利政の収録で、高遠城主内藤氏の祖先義清より、清成迄戦国時代頃の人々の事蹟である。	
	卷九十七	水野日州伝		伊藤長胤が、極めて簡単に記したもので、松本城主水野日向守忠幹の伝	
	卷九十八	華林寺過去帳		(欠本)	
	卷九十九	開闢縁起		(欠本)	
	卷百	諏訪縁起		(欠本)	
	卷百一	羽広縁起		(欠本)	
	卷百二	書名不明		(欠本)	
36	卷百三	木の下蔭	上	安永8年高縁藩士葛上紀流の著書で、高遠領内の地理、歴史、社寺、古跡、名勝、伝説等記してあり、特に高遠付近は詳細である。今から210年も前のもので、郷土史料としても貴重なものである。	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第九輯」収録
	卷百四	木の下蔭	中	卷百三に同じ	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第九輯」収録
	卷百五	木の下蔭	下	卷百三に同じ	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第九輯」収録
	卷百六	梅花無尽蔵	一	(欠本)	
	卷百七	梅花無尽蔵	二	(欠本)	
	卷百八	梅花無尽蔵	三	(欠本)	
	卷百九	梅花無尽蔵	四	(欠本) 長田徳本の医薬の処方を記したもので、慶長16年の作ではないか。	
	卷百十	天山詩集		(欠本)	
	卷百十一	桂叢書		(欠本)	
	卷百十二	注集状		(欠本)	
37	卷百十三	古証文収録		(欠本)	
	卷百十四	甲陽古事談		甲斐の武田氏より、延亨頃迄の領主の変遷事変等を記してある。	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第十一輯」収録
	卷百十五	甲陽軍鑑弁疑	上 中 下	甲陽軍鑑は、正は少なく、間違い多しといわれているが、その誤れる事実を挙げて意見を付してある。	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第二号」収録

38	卷百十六	晴清忠義伝		天正10年、織田信忠が武田氏討伐にさいし、高遠城を死守した仁科五郎盛信を中心として其の戦闘を述べたもので、晴清は盛信の前名である。	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第二号」収録
39	卷百十七	武功聞書		元禄5年、玄水子著、戦国頃より慶長頃迄、信州に関係深い人々の武功を書いている。	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第七輯」収録
	卷百十八	鳥居家系		(欠本) 高遠城主鳥居氏の系図と思われる。	
	卷百十九	飯田細釈記		別名飯田万年記とも云う。飯田城の開創より、享保17年迄の城地、領主の沿革変遷及町制の大略。	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第十輯」収録
	卷百二十	飯田細釈記追加		飯田及其の付近における天文、地象、動植物、名産其の他を記す。	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第十輯」収録
40	卷百二十一	千曲眞砂	前篇卷之一	佐久郡野沢郷瀬下敬忠が、宝暦3年に偏述したもので、信濃一円の地理歴史である。 信濃郡郷村高、租、城関、神社、産物、其の他	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第五輯」収録
	卷百二十二	千曲眞砂	前篇卷之二	名所和歌	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第五輯」収録
41	卷百二十三	千曲眞砂	前篇卷之三	城地、屋敷、役所等、松本 上田	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第五輯」収録
	卷百二十四	千曲眞砂	前篇卷之四	同 松代 飯田 高島	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第五輯」収録
42	卷百二十五	千曲眞砂	前篇卷之五	同 小諸 飯山 高遠	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第五輯」収録
	卷百二十六	千曲眞砂	前篇卷之六	同 所々の館	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第六輯」収録
43	卷百二十七	千曲眞砂	前篇卷之七	古城搔上砦小屋	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第六輯」収録
	卷百二十八	千曲眞砂	前篇卷之八	同	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第六輯」収録
44	卷百二十九	千曲眞砂	前篇卷之九	國中駅路行程	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第六輯」収録
45	卷百三十	千曲眞砂	前篇卷之十	芦田家譜並芦田家略譜	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第六輯」収録
	卷百三十一	甲州噺	上 下	(欠本)	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第六輯」収録
46	卷百三十二	上田軍記	上	天正13年家康が真田昌幸を上田城に攻めた時に始まり、関ヶ原の戦の際秀忠の上田攻め、昌幸父子の高山入り迄の事実を、読み物風に記したもの。	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第二号」収録
	卷百三十三	上田軍記	下	卷百三十二に同じ	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第二号」収録
	卷百三十四	真田家分限帳		(欠本)	
47	卷百三十五	伊那温知集	一	元文5年伊那郡木下の人 關盛胤の著で、伊那郡各郷村の石高、沿革、社寺、名所、古跡、古城跡、領主等を記したもので、伊那記、旧事記とも呼ばれる。伊那史料叢書の中にも採録され解題がある。	
	卷百三十六	伊那温知集	二	卷百三十五に同じ	
	卷百三十七	伊那温知集	三	卷百三十五に同じ	
	卷百三十八	伊那温知集	四	卷百三十五に同じ	
	卷百三十九	信濃城主得替記		(欠本)	
	卷百四十	信濃名所記		(欠本)	

48	卷百四十一	理慶尼の記		(欠本)	
	卷百四十二	信州伊那諏訪八十八所巡礼歌		(欠本)	
	卷百四十三	諏訪神社縁記		(欠本)	
	卷百四十四	徳本翁方聞		(欠本)	
	卷百四十五	異本信州城主記	上	(欠本)	
	卷百四十六	異本信州城主記	中	(欠本)	
	卷百四十七	異本信州城主記	下	(欠本)	
49	卷百四十八	箕輪記		天保4年中村元恒著、上伊那郡箕輪城主藤沢氏の興亡及箕輪の変遷沿革を記し、藤沢氏の由来より戦国時代を経て、徳川時代に至る重要な書である。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第十一輯」収録
	卷百四十九	箕輪記付録	上	中村元恒著、主として高遠城主の得替を記してある。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第十一輯」収録
	卷百五十	箕輪記付録	下	伊那一円の諸城主の得替を記してある。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第十一輯」収録

蓆原拾葉続目録

50	卷一	高遠記集成	上	高遠藩主星野葛山の著、高遠城の沿革、城主の得替を叙し、殊に織田信忠の武田氏攻撃に於ける、仁科盛信との攻防戦には最も力を注ぎ、内藤氏入城を以て終わっている。諸書の異説をも集めてあって、高遠城を知るには最もよいものである。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第十一輯」収録
	卷二	高遠記集成	下	卷一に同じ	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第十一輯」収録
51	卷三	小諸温古雑記	上	宝暦8年石川経則の草稿で小諸領主の変遷、城郭、神社、寺院、町部の名所古跡、事物等を記載し、追加として、浅間山、志那路、穀木、綿栲之説、信濃庄保郷名官道等がある。	
52	卷四	小諸温古雑記	下	卷三に同じ	
53	卷五	季花集		宗良親王が吉野朝のために東奔西走した間の歌を集めたもので、中に信濃に関する歌も多く、動静を窺うに足る貴重な歌集である。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第九輯」収録
54	卷六	甲斐名勝志	一	萩原元克編集天明2年の序がある、卷一には甲斐国領主の変遷、納租、郷名、神社、駅道、牧等について古代より叙説している。	
	卷七	甲斐名勝志	二	山梨郡	
	卷八	甲斐名勝志	三	八代郡	
	卷九	甲斐名勝志	四	巨摩郡	
	卷十	甲斐名勝志	五	都留郡	

55	卷十一	浪合の草露		浪合記、浪合記異本、浪合記続録記等に疑問が有るので、其の疑問を正さんが為に、実地踏査の上調査して、正しい文献を挙げて疑いを解いたものである。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第参輯」収録
	卷十二	俳諧解説抄		俳人野口在色が、享保3年に書き留めた俳諧についての随筆集である。	
56	卷十三	小笠原候代々法諡		小笠原氏歴代の簡単な系譜に法諡を記してある。	
	卷十四	松本諸士分限帳		時代不明	
	卷十五	武具要説		天正5年香坂弾正の記したものではないかといわれ、武田信玄の将士の武具について其の選び方、使い方、心得等が断片的に記されている。	
	卷十六	善光寺記行		完成6年7月、堯恵法師が、北陸道より越後路を経て善光寺に詣でた紀行文	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第八輯」収録
	卷十七	身延の道の記	上	京都より東海道を経て身延山に往復した旅行記で、寛文3年のもの。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第八輯」収録
	卷十八	身延の道の記	下	卷十七に同じ	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第八輯」収録
57	卷十九	桔梗原合戦記		小笠原長時と武田信玄との桔梗原合戦について記述したもので東間神主林氏の書留たものではないか。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第二号」収録
	卷二十	諏訪氏代々系譜		諏訪頼重より諏訪中林迄、天文より享保迄の代々に事実を記してある。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾貳輯」収録
	卷二十一	諏訪系譜		諏訪氏の元禄迄の系譜	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾貳輯」収録
	卷二十二	諏訪郡古跡		諏訪郡高島城を始め諸城の沿革、その他、諏訪神社に対する武将の信仰、神領、末社等の記事である。	
58	卷二十三	川中島両雄弁並付川中島合戦聞書		高遠藩士岡野禎淑が、宝暦7年に著したもの、川中島戦史のいずれも不備なのを見て自ら戦史を著し、自分の説を掲げている。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第七輯」収録
	卷二十四	臼挽歌		園原旧富が、皇国の道を一般里民に教える為、俚謡に作ったもの。	
59	卷二十五	貞女千代伝		文化11年更科郡久保永貞の著で、伊那郡小沢村(伊那市)の千代と云った貞女の伝記。	
	卷二十六	小県郡別所名所路記		別所七久里温泉の由来をとぎ、其の付近の寺社、名勝、古跡等を記した刊本である。	
	卷二十七	立科山略伝記	上	これも刊本をそのまま採録している。立科山及其の鎮座神のゆらい其の伝説を述べてある。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第貳拾輯」収録
	卷二十八	立科山略伝記	下	卷二十七に同じ	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第貳拾輯」収録

	卷二十九	富士山記		これも刊本で、富士山につき漢文で記した小品で、丘陽林呂亮著とある	上伊那郡教育会復刻「蓼原拾葉第八輯」収録
	卷三十	富岳記		肥後熊本、秋山玉山著、簡単な登山記である。	上伊那郡教育会復刻「蓼原拾葉第八輯」収録
	卷三十一	横川山巡覧		寛政11年5月、高遠藩老臣岡村十郎兵衛が、藩主の命により領内の川島村横川の山林を巡視した詳細な復命書である。	
60	卷三十二	信濃地名考	上	岩村田吉沢好謙が、安永2年著せしもの、信濃の地名、道路駅伝及其の地理歴史、名勝、旧蹟、物産、神社等、延喜式に関するものにつき考証したもので、史家の良い参考書である。この蓼原拾葉には刊本をそのまま採りいれている。	
	卷三十三	信濃地名考	中	卷三十二に同じ	
	卷三十四	信濃地名考	下	卷三十二に同じ	
61	卷三十五	土津霊神言行録	上	高遠藩主で後会津藩主になった保科正之、死後土津霊神と呼ばれた。即ち保科正之の言行録である。	
	卷三十六	土津霊神言行録	下	卷三十五に同じ	
62	卷三十七	大塔合戦記		応永7年小笠原長秀入信し、信濃諸毫と戦った大塔合戦の記録で、大塔木の梗概を和文に書き直したものである。	上伊那郡教育会復刻「蓼原拾葉第参輯」収録
	卷三十八	川中島合戦記		天文23年、24年、弘治4年の合戦を簡単に記したものである。	上伊那郡教育会復刻「蓼原拾葉第七輯」収録
	卷三十九	杉原彦左衛門物語		上杉氏武将の戦国時代の武功に関する物語で、寛永元年の作、隠れた事実を伺い知ることが出来る。	
	卷四十	駒ヶ岳記付戸隠記～大洞山霊松禅寺記*津金古碑銘		何れも漢文の極めて簡単な記事である。霊松寺記は千丈實岩が安永2年に撰したもの津金寺は佐久郡山部村にあって、この碑銘は現在長海撰となっている。	
	卷四十一	諏訪七不思議		諏訪七不思議についての簡単な記述である。	
	卷四十二	信長記武田滅亡抄		信長記の中より武田滅亡の箇所を抄出したものである。	上伊那郡教育会復刻「蓼原拾葉第七輯」収録
	卷四十三	総見記高遠城攻抜書		遠山信春の総見記中の信忠の高遠城攻撃の所を抄出したもので、信長記と大同小異である。	上伊那郡教育会復刻「蓼原拾葉第二号」収録
63	卷四十四	五番謡曲		白山、六道、蕎麦、犬房、天白、の5曲を揚げています。	現代語訳あり 上伊那郡教育会復刻「蓼原拾葉第拾四輯」収録
	卷四十五	鉾持謡曲		元起の外祖父矢野正直が、高遠鉾持神社の神徳を謡へるもので、享和2年に刊行したものである。	上伊那郡教育会復刻「蓼原拾葉第拾四輯」収録
	卷四十六	寝覚浦島太郎略縁記		木曾寝覚の床の浦島伝説を書いた刊本である。	
	卷四十七	ものくさ太郎		徳川時代通俗の読物として刊行されたものくさ太郎物語の刊行本を、そのまま綴入れたものである。	上伊那郡教育会復刻「蓼原拾葉第拾四輯」収録

64	卷四十八	道中里程記		五街道を始め、全国各地の主要道路の里程記である。諸所にこの類の写本はあるが大切な記録である。	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第八輯」収録
	卷四十九	新葉和歌集		宗良親王御撰の和歌集である、享保16年に写したものである。	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第貳拾輯」収録
65	卷五十	伊那郡神社仏閣記	上	伊那郡の神社仏閣の創立開基、宗旨、其の他を記す。伊那温知集の姉妹偏である。朱註がかなり入っている。	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第拾五輯」収録
66	卷五十一	伊那郡神社仏閣記	下	卷五十に同じ	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第拾五輯」収録
67	卷五十二	沙降記		上野伊勢崎藩、関重嶷の撰で、天明3年浅間山噴火について記してある。	
	卷五十三	沙降絵図		前巻の浅間山噴出を絵図にて示したものである。両書とも浅間山研究に大切な文献である。	
	卷五十四	震災記聞		弘化4年3月善光寺大地震についての記事で、星臯迂史の署名がある。	
	卷五十五	震災絵図		卷五十四の絵図	
	卷五十六	信越地震記		同じく、弘化4年の地震についての見聞記である。	
68	卷五十七	信濃国大絵図		皇部池田東離亭稿、天保6年松本高美屋発行の刊本である。	
69	卷五十八	眞武内伝	卷之一	真田家の祖先より説き起こし、真田信之が松代城を賜る迄の事蹟を詳述し、中でも、幸隆、昌幸、信之、幸村等の記述は特に詳細である。竹内軌定、拓殖宗辰の共偏である。	
	卷五十九	眞武内伝	卷之二	卷五十八に同じ	
	卷六十	眞武内伝	卷之三	卷五十八に同じ	
	卷六十一	眞武内伝	卷之四	卷五十八に同じ	
	卷六十二	眞武内伝	卷之五	卷五十八に同じ	
70	卷六十三	眞武内伝付録	卷之一	真田家及其の支族、逸事、武功を始め各般の事項に渡る記述である。	
	卷六十四	眞武内伝付録	卷之二	卷六十三に同じ	
	卷六十五	眞武内伝付録	卷之三	卷六十三に同じ	
	卷六十六	眞武内伝付録	卷之四	卷六十三に同じ	
	卷六十七	眞武内伝付録	卷之五	卷六十三に同じ	
	卷六十八	眞武内伝付録	卷之六	卷六十三に同じ	
71	卷六十九	滋野親王外伝	卷上	松代の富岡知明の撰である。北信に藩延した清和源氏の祖、清和天皇の皇子貞保親王の詳細な伝記であって、解説、引証、は精密をつくしている。	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第一号」収録
72	卷七十	滋野親王外伝	卷中	卷六十九に同じ	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第一号」収録
	卷七十一	滋野親王外伝	卷下	卷六十九に同じ	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第一号」収録
	卷七十二	滋野親王外伝補遺		卷六十九に同じ	上伊那郡教育会復刻「葦原拾葉第一号」収録

73	卷七十三	真田家沼田領村高支配所附		真田家と縁深い上野沼田、吾妻、利根、勢田の三都にわたり13万石余の各村石高帳である。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾六輯」収録
	卷七十四	八幡山番帳		八幡山警備組分け、用具其の他人名等を記してある。	
	卷七十五	小県郡真田旧領御図帳		真田領の支配人及貫高を記す、山口直昌の撰である。	
74	卷七十六	真田氏武功紀盛		嘉永2年上田の鎌原貫忠の著で、戦国頃の真田家の宗家78名の伝記を、漢文で簡単に記したもの。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第参輯」収録
	卷七十七	藩賢事略	卷之一	天保12年糸我希亮が、上田藩の主として学者10人許りの伝記をきしたもの。	
	卷七十八	藩賢事略	卷之二	卷七十七に同じ	
75	卷七十九	信濃国志		信濃の地誌で、沿革、古城、名所、物産等を記載している。	
	卷八十	覆韻余稿抄		松代藩の鎌原重賢の詩文集である。	
76	卷八十一	善光寺史略	卷之一	岩下貞融の撰で、仏教伝来より筆を起し、善光寺の創立を叙し、慶長頃迄の変遷を述べてある。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第貳拾輯」収録
	卷八十二	善光寺史略	卷之二	卷八十一に同じ	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第貳拾輯」収録
	卷八十三	善光寺別当伝略		同じく岩下貞融の撰、善光寺別当の起原より、其の変遷及事蹟を叙述している。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第貳拾輯」収録
77	卷八十四	沼田記		上野沼田城の創設より始まり、真田家の所領となり天和元年城地没収の始末を詳細し、寛保8年迄の変遷を記す。	
	卷八十五	再編吾妻記	卷之上	吾妻郡岩櫃城へ斉藤憲行が入城以来、慶長5年頃迄の領主の変遷や主な事件を記してある。	
	卷八十六	再編吾妻記	卷之中	卷八十五に同じ	
	卷八十七	再編吾妻記	卷之下	卷八十五に同じ	
78	卷八十八	上田原保屋野合戦		上田原、保屋野、戸石等に於ける武田氏と、村上、上杉氏の合戦記である	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第参輯」収録
	卷八十九	川中島五戦記 川中島五箇度合戦記 付録		戦記と称するが、川中島合戦の中、永禄4年の戦を読本体に記述したもので、付録には、甲陽軍鑑の説を、實見者が否定した論を掲げてある。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第七輯」収録
	卷九十	信州川中島古戦場地理記		本書も永禄4年の川中島合戦について記している。西寺尾村西法寺の所蔵と言われている。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第七輯」収録

79	卷九十一	小笠原家嫁入記		小笠原宗長の娘が、武田甲斐守へ嫁入の次第を記したもので、小笠原宗家の書留故小笠原流の婚礼式の様子がよくわかる。	
	卷九十二	忠輝公配流記		越後少将松平忠輝が、高島城へお預けとなった当時より、死去迄の記録。	
	卷九十三	福島正則断絶記		福島正則が流罪に至る顛末より当時の情勢を述べ、その後始末について記してある。	上伊那郡教育会復刻「蒨原拾葉第參輯」収録
	卷九十四	保科家分限帳並国替見立之控		保科正之が山形に国替となった時、上伊那郡地方より随従した人々は、正之が会津に移るや再びこれに従った。この記録は、会津に於けるそれらの人々の俸禄と、伊那郡の出身地とを掲げた分限帳である。見立の控と称すのは、山形移封の際随従の人々に、暇乞い又は見送りに出た村役人縁者の名前を記したものである。	
	卷九十五	信濃国大井法華堂文書		岩村田藩大井の法華堂所蔵文書を採録したもので、正和より天正に至る古文書の前文を収めてある。信州における貴重な文献の一つである。	
80	卷九十六	信陽雑誌		信陽雑誌は佐久郡吉沢好嫌が、延享元年に撰述した信濃全国に亙る地理、歴史に関する書である。 蒨原拾葉には信陽雑誌巻2より巻11と巻13及巻16の計12巻を採録してない。	
		信陽雑誌	卷之一	古代より信濃の変遷、景勝、風俗、租税	上伊那郡教育会復刻「蒨原拾葉第貳拾貳輯」収録
	卷九十七	信陽雑誌	卷之十二	領主変遷と主な事件	上伊那郡教育会復刻「蒨原拾葉第貳拾貳輯」収録
	卷九十八	信陽雑誌	卷之十四	領主変遷と主な事件	上伊那郡教育会復刻「蒨原拾葉第貳拾貳輯」収録
	卷九十九	信陽雑誌	卷之十五	領主変遷と主な事件	上伊那郡教育会復刻「蒨原拾葉第貳拾貳輯」収録
	卷百	信陽雑誌	卷之十七	領主変遷と主な事件	上伊那郡教育会復刻「蒨原拾葉第貳拾貳輯」収録
81	卷百一	信陽雑誌	卷之十八	領主変遷と主な事件	上伊那郡教育会復刻「蒨原拾葉第貳拾貳輯」収録
	卷百二	信陽雑誌	卷之十九	領主変遷と主な事件	上伊那郡教育会復刻「蒨原拾葉第貳拾貳輯」収録
	卷百三	信陽雑誌	卷之二十	小諸城主の変遷	上伊那郡教育会復刻「蒨原拾葉第貳拾貳輯」収録
	卷百四	信陽雑誌	卷之二十一	上田城主の変遷	上伊那郡教育会復刻「蒨原拾葉第貳拾貳輯」収録
	卷百五	信陽雑誌	卷之二十二	松代城主の変遷	上伊那郡教育会復刻「蒨原拾葉第貳拾貳輯」収録
	卷百六	信陽雑誌	卷之二十三	飯山城主の変遷	上伊那郡教育会復刻「蒨原拾葉第貳拾貳輯」収録
82	卷百七	信陽雑誌	卷之二十四	松本城主の変遷	
	卷百八	信陽雑誌	卷之二十五	高島城主の変遷	
	卷百九	信陽雑誌	卷之二十六	高遠城主の変遷	
	卷百十	信陽雑誌	卷之二十七	飯田城主の変遷	

	卷百十一	信陽雑誌	卷之二十八	須坂、岩村田、小諸各城主変遷	
	卷百十二	信陽雑誌	卷之二十九	福島、葛尾城主の変遷	
	卷百十三	信陽雑誌	卷之三十	長沼城主の変遷	
83	卷百十四	奉仕小録		寛保元年青木昆陽が探訪蒐集した古文書中菟、甲信のもの十数通について解説してある。	
	卷百十五	甲州略記		青木昆陽の説をもととして、甲州柵及甲州金について説明してある。	
	卷百十六	諏訪旧記		戦国頃の諏訪領主の盛衰や、城跡や神長官の書留などを採録してある。	
84	卷百十七	信州風土記		風土記残本17冊の内信濃国の部、普通為書といわれている。天正の写本より寛文年間に転写したものを更に転写したものである。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾四輯」収録
	卷百十八	觸髅考 (されこうべ・しゃれこうべ)		堤清十郎俊詮の撰で、嘉永2年佐久郡大久保村柳ノ下墓所より出でだし觸髅及石碑につき、詳細に記述し、諸文献により考証し、武田信蕃のものと言う説を記している。	
	卷百十九	浅間山焼出記		天明3年浅間山噴火の状況を図示し、又届出等を集めたものである。	
84	卷百二十	信州地震記 夜川村衷座記		信州地震記は弘化4年の善光寺地震につき、塩谷良平の著で、塚記は、弘化年中木曾夜川洪水の際の死者を祀る碑文で、武居彪の作である。	
	卷百二十一	列女阿蘇伝		阿蘇伝は、飯田城主堀家の為、候の妾を刺したお藤の伝説である。	
		川面隆利墓碣銘		川面墓碣銘は元恒の撰である、隆利は小藤太称し高遠藩士で、多賀谷智宣を殺して従容自刃した人である。	
	春女報讎(讐)記		春女は河越候の臣仙右衛門の女である、杉山東庵の撰である。		
85	卷百二十二	木曾考		寛永3年木曾代官山村良景の著で、義仲より義利に至る木曾氏の盛衰及山村氏祖先よりの事蹟をのべてある。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第十輯」収録
86	卷百二十三	加沢平次左衛門覚書		沼田城主真田信利の臣加沢平次左衛門が、沼田城主の変遷、戦役等について述べたものである。	
87	卷百二十四	諏訪騒動記		天明の始、諏訪郡高島藩家老諏訪大助の企てた諏訪家相続についての騒動の顛末を記してある。別に旅寝嚙故郷土産とも称されている。	
88	卷百二十五	羽尾記		上州吾妻郡羽尾村尾某の子孫、この地方を領有の由来から、真田氏の沼田城を経略するに至った次第を記してある。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾六輯」収録
	卷百二十六	信綱陽泰両寺記		小県郡信綱寺及陽泰寺の開創変遷を記す。	
	卷百二十七	信州木曾山義仲院濫觴		義仲院の開創沿革を記す。	

	卷百二十八	信州上田城攻		天正13年徳川家康が上田城に真田氏を攻撃した戦記。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第七輯」収録
	卷百二十九	真田氏大阪陣略記		真田氏の大坂出陣戦闘の様子を記載してある。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第七輯」収録
	卷百三十	小松氏系		高遠領勝間村、小松氏先祖の事蹟を掲ぐ。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第拾貳輯」収録
89	卷百三十一	沼田根元記		上野沼田城の起原変遷を書き、徳川氏始の時代の諸雑記を記してある。	
	卷百三十二	沼田軍記		沼田城に於ける諸戦役を記す。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第參輯」収録
90	卷百三十三	伊那志		伊那志略とも云う、伊那郡の郷村名、其の沿革、社寺、古跡、人物、産物等古文献を引証して解説している。中村元恒の著である、文化9年の序がある。	
	卷百三十四	高遠十景		高遠付近の十景を選び、伊沢文谷の絵に、諸家の詩歌俳句を題している。	
91	卷百三十五	伊那志略	卷一	大綱 卷133の伊那志よりは遥に詳細で、各村別にしてある。しかし前書は一卷に纏めてあるが、これは16巻、分量に於いての前書の10にもなっている。元恒は始め前書を著し、後更に改訂増補して本書が成りたつと思われる。双方に文化9年猪飼敬所の同じ序文がある。	
	卷百三十六	伊那志略	卷二	上伊那	
	卷百三十七	伊那志略	卷三	箕輪 手良	
	卷百三十八	伊那志略	卷四	川下	
	卷百三十九	伊那志略	卷五	藤沢	
	卷百四十	伊那志略	卷六	入野谷	
	卷百四十一	伊那志略	卷七	中沢	
	卷百四十二	伊那志略	卷八	晴近（春近）（上）	
	卷百四十三	伊那志略	卷九	晴近（春近）（下）	
	卷百四十四	伊那志略	卷十	大草 鹿塩 大河原 遠山	
92	卷百四十五	伊那志略	卷十一	下伊那川東	
	卷百四十六	伊那志略	卷十二	下伊那川西（上）	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第貳拾壹輯」収録
	卷百四十七	伊那志略	卷十三	下伊那川西（下）	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第貳拾壹輯」収録
	卷百四十八	伊那志略	卷十四	下條	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第貳拾壹輯」収録
	卷百四十九	伊那志略	卷十五	南山	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第貳拾壹輯」収録
	卷百五十	伊那志略	卷十六	付録	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第貳拾壹輯」収録

	卷百五十一	伊那沿革図		伊那郡の上古郡郷、中古の荘園、戦国時代の諸豪割拠、延喜式古駅とを各略図にて示しこれに簡単な説明をつけてある。	
93	卷百五十二	甲源記		中村元恒の著、甲斐源氏中、武田信玄より勝頼の滅亡迄の事蹟。	
	卷百五十三	源義仲伝略		(一名信源記) 中村元恒の著で、木曾氏の盛衰を述べてある。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第参輯」収録
	卷百五十四	信源記 続		中村元恒撰で、木曾氏の略系を掲げ、其の支族の変遷興亡を略記してある。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第参輯」収録
94	卷百五十五	伊那古道記		中村元恒撰、御坂道、諏訪街道について、駅路、其の変遷、付近の史蹟伝説などを述べている。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第四輯」収録
	卷百五十六	鉾持事略		中村元恒が、高遠町鉾持神社の草創沿革に関し、所説を引証して説き、古文書などもあげてある。	
	卷百五十七	遊駿志		中村元恒著、甲斐に入り身延山に詣で、東海道に出て久能山、駿府などに遊んだ紀行文で、富士山の美を賞揚している。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第八輯」収録
94	卷百五十八	山家温泉紀行 付録北信紀行		中村元恒が、文化9年山辺温泉に遊び、温泉の歴史、効用などを記した紀行文で、北信紀行は元恒が松本を経て善光寺に詣で、上田、諏訪を経て高遠に帰った紀行文である。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第八輯」収録
	卷百五十九	東遊覚書		中村家は、もと水野侯に仕えていた。其の縁故を以て、元恒が松本藩主水野稔侯に御機嫌伺いを願い出て、文化4年江戸にて伺候した時の顛末である。	
95	卷百六十	甲斐国全図		刊本、年月不詳、文化以後のものではないか。	
96	卷百六十一	上野国全図		筆写したもので年月不詳。	
97	卷百六十二	信濃奇談	上	主として伊那郡の珍談、奇談を集めたもので、元恒の男元鎧(松本堀内氏へ養子となる23歳没)の著である。文政12年刊行されている。	
	卷百六十三	信濃奇談	下	卷百六十二に同じ	
	卷百六十四	孝子源助傳		中村元恒の祖父崇広が門人伊東祐直に命じて、宮田村の孝子湯沢源助の事を書いたものを、元恒が文化8年に出版したものである。	
98	卷百六十五	甲鑑戦跡紀行	上巻	美濃中津藩の島津良介定垣が、弘化4年に著したもの。甲陽軍鑑所載の古跡を探り、武田家用兵術を臨地研究をしようと、江戸より甲斐を経て東海道に出て、三河より信濃路に入り碓氷峠を越えて江戸に帰った旅行記で、武田氏に関する各地を探訪し、史実を述べ講説を引いて考証説明をしている。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第四輯」収録
99	卷百六十六	甲鑑戦跡紀行	中巻	卷百六十五に同じ	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第四輯」収録
100	卷百六十七	甲鑑戦跡紀行	下巻	卷百六十五に同じ	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第四輯」収録

101	卷百六十八	信濃寄区一覧	巻一	天保五年佐久郡臼田の井出道貞の著で、信濃各地にわたり奇勝、奇聞。珍談寄話を始め、遺物、遺蹟に関する見聞を収録したもので、刊本の信濃奇勝録の名前で、内容も殆ど同じである。 巻一は筑摩郡の部である。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾七輯」収録
102	卷百六十九	信濃寄区一覧	巻二	安曇郡 水内郡	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾七輯」収録 上伊那郡教育会復刻版は佐久までになっている
103	卷百七十	信濃寄区一覧	巻三	佐久郡 小県郡	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾八輯」収録
104	卷百七十一	信濃寄区一覧	巻四	諏訪郡 伊那郡	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾八輯」収録
105	卷百七十二	信濃寄区一覧	巻五	埴科郡 更科郡 高井郡	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾八輯」収録
106	卷百七十三	真田系譜		(欠本)	
	卷百七十四	信州松代藩川中島知行目録		(欠本)	
	卷百七十五	真田家役人数積		(欠本)	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾六輯」収録
	卷百七十六	源氏見枕		(欠本)	
	卷百七十七	龍陽寄事		(欠本)	
107	卷百七十八	室町通記	上巻	中村元恒の著で、元弘の変より筆を起し、足利幕府の創立より其の滅亡迄偏年体に事実を記しその間尚武論(中村元恒著)の一流の精神を以て著者の意見批評を加えてある。	
	卷百七十九	室町通記	中巻	卷百七十八に同じ	
	卷百八十	室町通記	下巻	卷百七十八に同じ	
108	卷百八十一	言の出次第		中村元恒の著である。尹良親王、聖徳太子、管公、義仲、正成等七、八人の事蹟につき、異説を挙げ これに批評を試みたものである。	
109	卷百八十二	ひとつばなし		中村元恒著、元恒知友の逸話、異聞を面白く記したものである。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第九輯」収録
	卷百八十三	ひとつくちばなし	続編	中村元恒著、多くの寄事、異聞を書留てある。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第九輯」収録
110	卷百八十四	宮田村貫帳		(欠本)	
	卷百八十五	一ノ瀬氏書柬		(欠本)	
	卷百八十六	駒嶽紀遊		(欠本)	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第八輯」収録
	卷百八十七	天山墓碣銘		(欠本)	
	卷百八十八	龍水吉川先生遺稿		(欠本)	
	百八十九	中村中宗詩稿		(欠本)	
111	卷百九十	古碑考		日本著名の古碑について解説し、尚著者の意見を加えたもので、中村元恒の著。	

112	卷百九十一	信濃乃篤		中村元恒の著で、諸書にあらわれた寄譚や、事変、人物、社寺等、見るにつれて採録したものである。	
	卷百九十二	信濃乃篤	続	中村起元の著で、父元恒に倣って作ったものである。僧侶、寺院の記事が多い。	
113	卷百九十三	甲斐国志		松平伊予守貞能が、甲府勤番支配となった在勤中、甲斐には未だ完全な地誌のないのを概し、文化2年より起稿し、十ヶ年を経て完成したもので、甲斐全国に亘ってこまかく分別している。	
			卷之一	堤要	
114	卷百九十四	甲斐国志	卷之二	国法の部	
115	卷百九十五	甲斐国志	卷之三	村里部 第一	
	卷百九十六	甲斐国志	卷之四	村里部 第二	
	卷百九十七	甲斐国志	卷之五	村里部 第三	
	卷百九十八	甲斐国志	卷之六	村里部 第四	
116	卷百九十九	甲斐国志	卷之七	村里部 第五	
	卷二百	甲斐国志	卷之八	村里部 第六	
	卷二百一	甲斐国志	卷之九	村里部 第七	
	卷二百二	甲斐国志	卷之十	村里部 第八	
	卷二百三	甲斐国志	卷之十一	村里部 第九	
117	卷二百四	甲斐国志	卷之十二	村里部 第十	
	卷二百五	甲斐国志	卷之十三	村里部 第十一	
	卷二百六	甲斐国志	卷之十四	村里部 第十二	
118	卷二百七	甲斐国志	卷之十五	村里部 第十三	
	卷二百八	甲斐国志	卷之十六	村里部 第十四	
	卷二百九	甲斐国志	卷之十七	村里部 第十五	
	卷二百十	甲斐国志	卷之十八	村里部 第十六	
119	卷二百十一	甲斐国志	卷之十九	村里部 第十六ノ下	
	卷二百十二	甲斐国志	卷之二十	山川部 第一	
	卷二百十三	甲斐国志	卷之二十一	山川部 第二	
	卷二百十四	甲斐国志	卷之二十二	山川部 第三	
120	卷二百十五	甲斐国志	卷之二十三	山川部 第四	
	卷二百十六	甲斐国志	卷之二十四	山川部 第五	
	卷二百十七	甲斐国志	卷之二十五	山川部 第六	
	卷二百十八	甲斐国志	卷之二十六	山川部 第七	
	卷二百十九	甲斐国志	卷之二十七	山川部 第八	

	卷二百二十	甲斐国志	卷之二十八	山川部 第九	
	卷二百二十一	甲斐国志	卷之二十九	山川部 第十	
121	卷二百二十二	甲斐国志	卷之三十	山川部 第十一	
	卷二百二十三	甲斐国志	卷之三十一	山川部 第十二	
	卷二百二十四	甲斐国志	卷之三十二	山川部 第十三	
	卷二百二十五	甲斐国志	卷之三十三	山川部 第十四	
122	卷二百二十六	甲斐国志	卷之三十四	山川部 第十五	
	卷二百二十七	甲斐国志	卷之三十五	山川部 第十六ノ上	
	卷二百二十八	甲斐国志	卷之三十六	山之部 第十六ノ中	
123	卷二百二十九	甲斐国志	卷之三十七	川之部 第十六ノ下	
	卷二百三十	甲斐国志	卷之三十八	古蹟部 第一	
124	卷二百三十一	甲斐国志	卷之三十九	古蹟部 第二	
	卷二百三十二	甲斐国志	卷之四十	古蹟部 第三	
125	卷二百三十三	甲斐国志	卷之四十一	古蹟部 第四	
	卷二百三十四	甲斐国志	卷之四十二	古蹟部 第五	
	卷二百三十五	甲斐国志	卷之四十三	古蹟部 第六	
	卷二百三十六	甲斐国志	卷之四十四	古蹟部 第七	
126	卷二百三十七	甲斐国志	卷之四十五	古蹟部 第八	
	卷二百三十八	甲斐国志	卷之四十六	古蹟部 第九	
	卷二百三十九	甲斐国志	卷之四十七	古蹟部 第十	
127	卷二百四十	甲斐国志	卷之四十八	古蹟部 第十一	
	卷二百四十一	甲斐国志	卷之四十九	古蹟部 第十二	
	卷二百四十二	甲斐国志	卷之五十	古蹟部 第十三	
	卷二百四十三	甲斐国志	卷之五十一	古蹟部 第十四	
	卷二百四十四	甲斐国志	卷之五十二	古蹟部 第十五	
128	卷二百四十五	甲斐国志	卷之五十三	古蹟部 第十六	
	卷二百四十六	甲斐国志	卷之五十四	古蹟部 第十六ノ下	
	卷二百四十七	甲斐国志	卷之五十五	神社部 第一	
129	卷二百四十八	甲斐国志	卷之五十六	神社部 第二	
	卷二百四十九	甲斐国志	卷之五十七	神社部 第三	
	卷二百五十	甲斐国志	卷之五十八	神社部 第四	
	卷二百五十一	甲斐国志	卷之五十九	神社部 第五	
	卷二百五十二	甲斐国志	卷之六十	神社部 第六	

130	卷二百五十三	甲斐国志	卷之六十一	神社部 第七	
	卷二百五十四	甲斐国志	卷之六十二	神社部 第八	
	卷二百五十五	甲斐国志	卷之六十三	神社部 第九	
	卷二百五十六	甲斐国志	卷之六十四	神社部 第十	
	卷二百五十七	甲斐国志	卷之六十五	神社部 第十一	
	卷二百五十八	甲斐国志	卷之六十六	神社部 第十二	
131	卷二百五十九	甲斐国志	卷之六十七	神社部 第十三	
	卷二百六十	甲斐国志	卷之六十八	神社部 第十四	
	卷二百六十一	甲斐国志	卷之六十九	神社部 第十五	
	卷二百六十二	甲斐国志	卷之七十	神社部 第十六	
	卷二百六十三	甲斐国志	卷之七十一	神社部 第十七ノ上	
132	卷二百六十四	甲斐国志	卷之七十二	神社部 第十七ノ下	
	卷二百六十五	甲斐国志	卷之七十三	仏寺部 第一	
	卷二百六十六	甲斐国志	卷之七十四	仏寺部 第二	
133	卷二百六十七	甲斐国志	卷之七十五	仏寺部 第三	
	卷二百六十八	甲斐国志	卷之七十六	仏寺部 第四	
134	卷二百六十九	甲斐国志	卷之七十七	仏寺部 第五	
	卷二百七十	甲斐国志	卷之七十八	仏寺部 第六	
	卷二百七十一	甲斐国志	卷之七十九	仏寺部 第七	
	卷二百七十二	甲斐国志	卷之八十	仏寺部 第八	
	卷二百七十三	甲斐国志	卷之八十一	仏寺部 第九	
135	卷二百七十四	甲斐国志	卷之八十二	仏寺部 第十	
	卷二百七十五	甲斐国志	卷之八十三	仏寺部 第十一	
	卷二百七十六	甲斐国志	卷之八十四	仏寺部 第十二	
	卷二百七十七	甲斐国志	卷之八十五	仏寺部 第十三	
	卷二百七十八	甲斐国志	卷之八十六	仏寺部 第十四 欠本	
	卷二百七十九	甲斐国志	卷之八十七	仏寺部 第十五 欠本	
	卷二百八十	甲斐国志	卷之八十八	仏寺部 第十六 欠本	
136	卷二百八十一	甲斐国志	卷之八十九	仏寺部 第十七 欠本	
	卷二百八十二	甲斐国志	卷之九十	仏寺部 第十七ノ下	
	卷二百八十三	甲斐国志	卷之九十一	修験部	
137	卷二百八十四	甲斐国志	卷之九十二	人物部 第一 上代国守並属官	
	卷二百八十五	甲斐国志	卷之九十三	人物部 第二 上代姓氏部	
	卷二百八十六	甲斐国志	卷之九十四	人物部 第三 武田氏世家部	
	卷二百八十七	甲斐国志	卷之九十五	人物部 第四 武田親族之部	

138	卷二百八十八	甲斐国志	卷之九十六	人物部 第五 武田将師部 (一)	
	卷二百八十九	甲斐国志	卷之九十七	人物部 第五 武田将師部 (二)	
139	卷二百九十	甲斐国志	卷之九十八	人物部 第五 武田将師部 (三)	
	卷二百九十一	甲斐国志	卷之九十九	人物部 第八 武田家令史部	
140	卷二百九十二	甲斐国志	卷之百	人物部 第九 天正壬午以後国守吏	
	卷二百九十三	甲斐国志	卷之百一	人物部 第十 付録	
141	卷二百九十四	甲斐国志	卷之百二	土庶部 第一 府中	
	卷二百九十五	甲斐国志	卷之百三	土庶部 第二 山梨郡万力筋	
	卷二百九十六	甲斐国志	卷之百四	土庶部 第三 山梨郡栗原筋	
142	卷二百九十七	甲斐国志	卷之百五	土庶部 第四 八代郡大石和筋	
	卷二百九十八	甲斐国志	卷之百六	土庶部 第五 八代郡小石和筋	
	卷二百九十九	甲斐国志	卷之百七	土庶部 第六 八代郡中郡筋	
	卷三百	甲斐国志	卷之百八	土庶部 第七 山梨郡中郡筋	
	卷三百一	甲斐国志	卷之百九	土庶部 第八 巨摩郡中郡筋	
143	卷三百二	甲斐国志	卷之百十	土庶部 第九 巨摩郡北山筋	
	卷三百三	甲斐国志	卷之百十一	土庶部 第十 山梨郡北山筋	
	卷三百四	甲斐国志	卷之百十二	土庶部 第十一 巨摩郡逸見筋	
	卷三百五	甲斐国志	卷之百十三	土庶部 第十二 巨摩郡武河筋	
	卷三百六	甲斐国志	卷之百十四	土庶部 第十三 巨摩郡西部筋	
	卷三百七	甲斐国志	卷之百十五	土庶部 第十四 八代郡西部筋	
144	卷三百八	甲斐国志	卷之百十六	土庶部 第十六 巨摩郡西河内領	
	卷三百九	甲斐国志	卷之百十七	土庶部 (第十六) 八代郡東河内領	
	卷三百十	甲斐国志	卷之百十八	土庶部 第十七 僧英部 劍工部	
145	卷三百十一	甲斐国志	卷之百十九	武田家、鎧、旗、花押、文書等	
	卷三百十二	甲斐国志	卷之百二十	付録 碑文	
	卷三百十三	甲斐国志	卷之百二十一	付録 古文書	
146	卷三百十四	甲斐国志	卷之百二十二	付録、碑文、梁文、晴信詩歌	
	卷三百十五	甲斐国志	卷之百二十三	産物製造部	
147	卷三百十六	会津藩士戦死名簿	卷之一	明治維新の会津戦没に於いて、戦死した会津藩方の身分氏名を記録したもので、卷之94と対照すれば伊那出身の人々の子孫の活動も窺へる。	
148	卷三百十七	会津藩士戦死名簿	卷之二	卷三百十六に同じ	
149	卷三百十八	会津藩士戦死名簿	卷之三	卷三百十六に同じ	
150	卷三百十九	会津藩士戦死名簿	卷之四	卷三百十六に同じ	

151	卷三百二十	荒野乃管	卷之一	中村元恒の著で、伊那、諏訪、木曾、松代等の戦国時代以後の城主変遷史である。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第十輯」収録
	卷三百二十一	荒野乃管	卷之二	卷三百二十に同じ	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第十輯」収録
	卷一百	荒野乃管	卷之三	卷三百二十に同じ	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第十輯」収録 上伊那郡教育会復刻版には卷之三百二十二とあり
152	卷三百二十二	委寧の中路		欠本 菅江真澄遊覧記中の天明3年伊那より松本地方の旅日記である。	
153	卷三百二十三	わがころ		欠本 菅江真澄が天明3年姥捨山への観月紀行文である。	
	卷三百二十四	来目路濃橋		欠本 天明4年6月、菅江真澄が洗馬を出て、越後に行った紀行文である。	
154	卷三百二十五	保科略系		高遠城主で、後会津城主となった保科氏の、明治初年までの略系である。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾貳輯」収録
	卷三百二十六	浴泉紀勝 一名伊香保土産		北沢正誠が明治初年伊香保に遊び、付近の名勝、古跡、山川等の地誌である。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾四輯」収録
	卷三百二十七	浴泉紀勝付録		前巻の付図である。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾四輯」収録
155	卷三百二十八	赤羽記		高遠城主であった保科氏の由来と共に、其の臣下の赤羽氏の武功を記したものである。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第十一輯」収録
156	卷三百二十九	脇坂家譜	上	飯田城主であった脇坂氏の系譜で、安明、安治の頃より幕末に及んでいる。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾参輯」収録
157	卷三百三十	脇坂家譜	下	上巻の続きで、明治初年に及んでいる。	
158	(番号欠番)	板町落葉		明治2年中村元起の著である。高遠の史跡について説いている。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第九輯」収録
	卷三百三十一	甲州武田家人名考	卷之一	武田家の主な将士について、イロハ順に略伝を掲げている。	
159	卷三百三十二	甲州武田家人名考	卷之二	卷三百三十一の続き	
160		沓野日記	上	嘉永元年佐久間象山が、高井郡沓野村岩菅山を踏破見聞した記録。	
	卷三百三十三	沓野日記	下	嘉永元年佐久間象山が、高井郡沓野村岩菅山を踏破見聞した記録。	
		西京日記		元治元年の佐久間象山滞京日記である。	
161	卷三百三十四	真田家譜略伝	上 下	真田家代々の伝記で、始祖より明治初年までである。 (下巻には標題なし)	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾六輯」収録

162	卷三百三十五	彦城雑話		高遠藩阪本天山が、寛政10年彦根に再遊した時の紀行文である。僧海量その他彦根藩士との交遊、訪客等、記事豊富である。	
	(番号欠番)	紀南遊囊		阪本天山が寛政10年冬より、同11年春にかけて、大阪より南下して紀伊海岸を回り、伊勢に出て帰坂した旅行記である。捕鯨の話、外国船入港の話其の他趣味のある事が多い。	
	(番号欠番)	国郡管轄考		高遠藩の学者で殊に史学に秀でていた星野葛山の著書で、中村元恒も葛山を先輩として畏敬していた。巻末に元恒の求めに応じて、文化9年これを草した旨を奥書してある。上古郡懸制の土地支配より武憲政治の起つたのを説き、豊臣氏で終わっている。	
	(番号欠番)	田制沿革考		星野葛山の文化5年の著書である。我が国の田制、租庸調等の沿革を記して考証してある。前者と土舞偏をなすと云ってもよい。豊臣氏で終わっている。	
163	卷三百三十六	淡斎先生詩集	初偏卷之一 初偏卷之三 二偏卷之一 二偏卷之三	元恒の父元茂の詩を集めたものである。	
	(番号欠番)	淡斎先生文集		同じく文集である。	
164	卷三百三十七	平野物語		熊本藩士平野新三郎が、父の仇を打つ為に、伊那郡宮所(辰野町)堀内嘉須見に剣を学び後首尾よく仇を打った物語である。堀内嘉須見は荒木流の剣客として名声のあった人である。	
	(番号欠番)	徳芸本末説		中村元恒祖父龍水の自筆	
	(番号欠番)	文武筭記			
	(番号欠番)	寺社記			上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第拾五輯」収録
165	卷三百三十八	参考 信濃宮伝		中村元恒校と署名してある。宗良親王、尹良親王の伝記である信濃宮伝に、広く数多の説をあげて註をつけたもので、親王の事蹟を勘考する上に於いて良い参考となる。	上伊那郡教育会復刻「蕨原拾葉第一号」収録
	(番号欠番)	信濃水上郡山路歴検図		裾花川に添った地方の見聞記で見事な写生の絵が入っている。松濤軒安静著。	
	(番号欠番)	医務		中村元敬の著書である。	
	(番号欠番)	中村信齋先生遺文			

落原拾葉続の冊数及巻数を記したものは、これだけで終わっている。この外製本体裁は前記の書籍と同様な物が9冊ある。仮に第何冊としてつぎに掲げる。然し標題を一つだけ挙げてあるが、第4冊、第5冊、第6冊、第7冊の様に内容は様々のものを採録してある。この中には、前記巻中の欠本になっているものもある。当然其巻に組見入れるべきものであるが、原本のままにしておく。

166	第一冊	内藤家譜	上	高遠城主内藤氏の伝記で、始祖内藤義清より、明治初年の頼直迄を記してある。	
167	第二冊	内藤家譜	下	前に同じ	
168	第三冊	内藤家譜	付録	幕末より、高遠藩の終り迄の公文書の収(蒐)集で、通達、届書等が多く採録してあり、当時の情勢を見るによいものである。	
169	第四冊	諏訪系譜		高島城主の諏訪氏の家系伝記で、明治初年迄記録されている。	
		晴清忠義伝	乾之巻	巻百十六に入るものである。	
		打越家系		簡単に記されている。	
		真田内伝		真田家の伝記である、落原拾葉巻十九で、欠本となっているもの。	
		滋野姓氏権輿		滋野氏の姓氏のおこりを記してある。	
170	第五冊	堀氏家譜		飯田城主であった堀氏の家系伝記であり、明治初年迄きされている。	上伊那郡教育会復刻「落原拾葉第拾参輯」収録
171	第六冊	諸国廢城考	卷之二十一	信濃に於ける廢城を挙げその沿革をきしてある。	
		城主家替記		信濃諸城の領主変遷を記している。	
		仰応貴録 一名松代遺聞		松代城主真田氏に関する諸説を収録してある。	

172	第七冊	参考海野歴代記		海野氏の代々の伝記変遷を記し、諸説を収録してある。	
		遊方名所略	巻七	東山道 信濃乃部で、信濃の地誌である。	
		下条由来記		巻二十三の下条由来記と同じものである。	
		信濃国埴科榑原庄中条宮弁天由来記			
		山形大弐藤井右衛門御仕置被仰渡			
		諸家興亡記	巻三	真田氏の部を採録してある。	上伊那郡教育会復刻「蓆原拾葉第拾六輯」収録
		甲斐風土記		蓆原拾葉巻十四と同じ	
		長尾輝虎注進状			
173	第八冊	弘化四年地震水災ニツキ御届		信濃諸侯の届出を収録。	
174	第九冊	御料所信州高井郡御届出書		弘化4年の地震についての届出である。	
		弘化四年川中島大地震諸藩届書			